「トビタテ！留学ＪＡＰＡＮ日本代表プログラム」

-始動から１年-

TOBITATE! Young Ambassador Program:

A Year after Launching of the Program

文部科学省 官民協働海外留学創出プロジェクト プロジェクトディレクター
日本学生支援機構 グローバル人材育成部長
船橋 力
FUNABASHI Chikara
(Public-Private Joint Project for Overseas Education Promotion,
Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology)
(Global Human Resource Development Division,
Japan Student Services Organization)

キーワード：トビタテ、海外留学、グローバル人材育成、官民協働

はじめに

諸外国の海外留学者数が増加する中、2004 年以降の日本人の海外留学者数は、2013 年に久々に増加に転じるまで減少傾向にあった。これらの現状をみて、2013 年、官民協働で「トビタテ！留学 JAPAN」プロジェクトが立ち上がった。2020 年までに大学生等の海外留学を 12 万人（現状６万人）、高校生の海外留学を６万人（現状３万人）への倍増を目指している。この「トビタテ！留学 JAPAN」キャンペーンは、社会総掛かりで取り組むことが、留学者数を増加させる有効な手段だと考えており、その中でもメインの施策が、昨年からスタートした「官民協働海外留学支援制度～トビタテ！留学 JAPAN 日本代表プログラム～」（以下、本プログラム）だ。本プログラムは、民間企業の寄附により支えられており、2020 年までに１万人の支援とそれを支える 200 億円の寄附を目指している。

こうした目標のもと、我々「官民協働海外留学創出プロジェクトチーム」（以下、PT）は本プログラムを実施すべく、平成 26 年度に設置された。PT のメンバーは、文部科学省、日本学生支援機構、大学からの職員、そして、支援企業からの出向を含む民間企業等の人材から構成されており、それぞれの知見を活かし、新しい取組である本プログラムの運営を行っている。

独立行政法人日本学生支援機構 Copyright © JASSO. All rights reserved.

本稿では、“対象となる留学”、“支援の内容”及び“支援企業の関わり”という観点で、本プログラムを紹介したい。本プログラムのあり方が、社会の様々な場面で行なわれているグローバル人材育成の施策にとって少しでも参考になればと思う。

自分の夢・想いを実現するための留学を支援

本プログラムの特徴は様々あるが、第一に挙げられるのが、学生自ら作成した留学計画を支援するという仕組みだ。学生が、留学における目的を考え、その達成に向け、行った先で何をするか、具体的な行動計画を作成する。その計画に正解はなく、何をやりたいのか、自身の夢や想いをしっかり持つことが起点となる。選考の基準と関わるが、計画を実施できる情熱と意志を持っているかが何より大事だと考えている。また、留学中に座学だけではなく、インターンやボランティアといった実践的な活動を行うことを重視している。折角の留学という機会を、学校で授業を受けるだけで終わらせず、多様な国籍・役割の人と出会い、協働し、成果創出に関わることで、そのプロセスの中で発生する葛藤や失敗経験からより深いレベルで多様な価値観や考え方に触れ、グローバル感覚を養ってほしいと考えるからである。

こうした思いを踏まえ、平成 26 年度（第 1 期）は 4 つのコース（自然科学系、複合・融合系人材コース[1]・新興国コース・世界トップレベル大学等コース・多様性人材コース）で、学生の募集を行い、300 人の募集定員に対して 1,700 人の応募があり、最終的に 323 人が選抜された。そして、平成 27 年度は、前期（第 2 期）と後期（第 3 期）の半期毎に募集を行い、第 2 期は 256 名、第 3 期は 404 名が選抜された。

また、平成 27 年度からは、4 つのコースの他、地域人材コースと高校生コースを新規に設置することで、その対象を拡大している。

地域人材コースは、地域活性を目指し、地域のグローバル化に貢献する人材の輩出を目的としている。ただ留学するだけではなく、地域企業でのインターンシップを留学前後に必ず行うことを要件としているため、その地域の特徴を理解してから、留学先での学びを深めることができるという効果を期待できるとともに、地域の企業と学生との交流が生まれることで、地域に貢献できる人材を育成したいと考えている。こうした背景のもと、対象となる地域の公募を行い、7 地域を選定した。地域人材コースに関しては、各地域で産学官が連携した協議会を設置し、留学プログラムの開発から運営を行うことにしているため、各採択地域が応募・選考を行い、第 3 期では、42 名の合格者を出すに至った。

高校生コースは、将来の選択肢を広げるため、より早い段階での海外経験を支援することを目的に、

[1] 現在は、“理系、複合・融合系分野コース”と名称を変更。

独立行政法人日本学生支援機構 Copyright © JASSO. All rights reserved.

４つの分野（アカデミック分野・スポーツ・芸術分野・プロフェッショナル分野・国際ボランティア分野）を設定し、募集を行い、303 名の生徒が選抜された。

４つのコースの第１期の派遣留学生は、昨年８月下旬より順次留学を開始しているが、既に帰国した者もおり、かけがえのない経験ができたという感想を多く聞く。ここでは留学中の者を含め、留学計画や苦労したこと等、以下３点について、派遣留学生の声を紹介することとしたい。

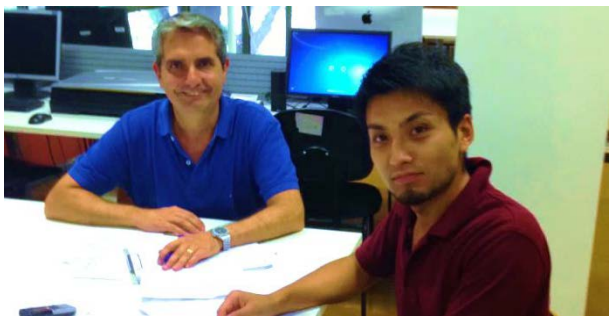
Ｑ１．留学計画の概要

Ｑ２．苦労したことや、うれしかったこと

Ｑ３．今後の夢や目標

【自然科学系、複合・融合系人材コース】アウェイな環境で成果を上げた経験を社会人生活でも活かしたい

岡田茂樹さん（横浜国立大学）、留学先：ブラジル



Ａ１．修士論文テーマである南米への日本の都市計画技術移転に関する調査と専門家との関係構築を行いました。また、併行してサッカー部に所属し、本場の環境で技術を磨き、最終的にはチーム新人王を獲得しました。

Ａ２．誰も知り合いがいない中、有識者を探して協力を仰がなくてはならず、苦労しました。ただ、小さいことでもこつこつ続けることで次第に周囲の理解と協力が得られ、留学生の中で唯一、表彰されたのは大きな自信となりました。

Ａ３．留学を機にグローバルな事業に従事したいという意欲が一層高まり、2015 年４月に総合商社に就職しました。専門分野である都市づくりやインフラ整備に貢献するため、日々努力していきます。

【世界トップレベル大学等コース】夢の NY インターンシップが現実に。日本の魅力を世界に伝える PR のプロを目指す。

瀧幸乃さん（早稲田大学）、留学先：米国

Ａ１．多種多様な人と出会い、自分の可能性や自分という人間を追求した１年でした。実践活動として「ボストン日本春祭り」に出展し、約 1,000 人の方々の夢が書かれた桜型のメッセージカード

独立行政法人日本学生支援機構 Copyright © JASSO. All rights reserved.

を集め、日本の美しい春を表現しました。冬休みには夢だったニューヨークでのインターンシップに参加し、貴重な経験となりました。

Ａ２．NY での実務体験を通じて人には誰しもその人にしかない大切なストーリーがあることを学びました。様々な人の想いに熱心に耳を傾けることで、その人の価値観や世界観を受け入れ、自己を見つめ直し、自分が最も大切にしたいことを再確認できました。

Ａ３．日本の魅力を海外に広める PR プロフェッショナルとして活躍したいです。今後は日本国内を旅しながら日本の良いところを探し、同時に PR パーソンに求められる人脈構築能力や書く力、話す力を向上させたいです。

【新興国コース】引きこもりだった自分がラオスの小さな教室で起こした奇跡

高木一樹さん（東洋大学）、留学先：ラオス

Ａ１.「引きこもりだった自分を前向きに変えてくれた貧困層の子どもに恩返しがしたい！」・・・そんな思いから、ラオスで初等教育事業の立ち上げに挑戦しました。現場の声を頼りに、映像や音楽を活用した教材制作と授業を実施しました。

Ａ２．ラオスには人脈も知識もなく、日本とは異なる教育環境の中で効果的な教育方法を模索し、ついにラオス初の掛け算九九の歌を考案しました。生徒が楽しく学び成果を上げると、先生も協力的になり、小学１年生の平均点を 15 日間で 50 点近く上げるという成果を出すことが出来ました。

Ａ３．誰もが私たちの教材を使いこなせるようなガイドビデオを制作したいです。帰国後も継続して教育支援を続けつつ、国連ユースボランティアへの参加など新しいことにも挑戦して行きたいです。

【多様性人材コース】海外経験が少ない私でも乗り越えられた！異文化での建築＆アートプロジェクト

上田早織さん（九州大学）、留学先：フランス

Ａ１．世界中から集まる留学生と共に、ヨーロッパの建築と都市空間におけるパブリックアートを学んでいます。授業ではグループで作品を制作し、実践活動としてアテネとパリで設計を行いました。

Ａ２．海外経験も少なく緊張しやすい性格の私に

独立行政法人日本学生支援機構 Copyright © JASSO. All rights reserved.

とって、大勢を前にした英語やフランス語でのプレゼンテーションは本当に大変でしたが、友人や先生の助けにより乗り越えられました。また、異文化での建築プロジェクトの進め方は驚きの連続で、常識に縛られず多様な選択肢を持てるようになりました。

Ａ３．アテネやパリにおける建築プロジェクトやパブリックアート作品の制作経験を活かし「ものをデザインする」ことで日本社会に貢献していきたいです。

以上４人の派遣留学生の声を紹介したが、こうした形で派遣留学生は、自分の夢・想いの実現のため、様々な国・地域に留学している。

留学の質を最大化する事前・事後研修

自分の夢・想いを追及し留学する学生に対する支援の具体的な内容だが、一般的な国の予算による支援に比べ手厚く、奨学金、渡航費、そして授業料等が給付され、これらを返済する必要はない。具体的には、現地活動費として月額 12 万～20 万円を支給するほか、年間上限 30 万円の補助を留学先の授業料として支給する。こうした経済的な支援の他に本プログラムでは、教育支援として留学前の事前研修と帰国後の事後研修を提供している。

事前・事後研修は、留学という“経験”から如何に学び、その効果を最大化するかを中心に構成している。事前研修では、経験の量を多く獲得するために、“飛びこむ”をキーワードとし、留学中に様々なことに対してチャレンジするよう伝えている。一方で、事後研修では、留学という経験をしっかり振り返り、内省を行うことで、経験の質を高め次の活動につなげることを目的としている。このように経験から学ぶことを中心に研修を構成しているが、その効果をより高めるための起点となると強く感じているのが「自分の軸（アイデンティティ）」を知ることだ。私の海外での体験からも実感するところだが、海外での生活は、文化や環境の違いから自分の価値観が揺さぶられ、自分が何者なのかを問うことが多いと考える。また、経験から学ぶ上でも、自分の軸が定かでないと効果的に経験による学びが蓄積されない。そこで事前研修では、少しでも自分の価値観・考え方への理解を深めるために自己分析などを行い、事後研修では、事前研修での自己理解を振り返りつつ、将来の志を考え、自分の軸の整理を行っている。こうした自分の軸を深めていく上で、特に意識しているのが、ロールモデルの提供だ。様々な領域で活躍するグローバルリーダーを招聘し、経験談を語って頂くことで、イメージを具体化できるようにサポートしている。

更に、事前・事後研修では、下記の３つのロール（役割）を提示し、日本代表として活躍してくれることを期待している。

① Global Leader：留学を通じて最大限に成長し、将来の「グローバルリーダー」を目指す。

② Ambassador：留学期間中は、「日本のアンバサダー（大使）」として日本の良さを発信する。

独立行政法人日本学生支援機構 Copyright © JASSO. All rights reserved.

③ Evangelist：日本の留学生増加のための「留学のエバンジェリスト（伝道師）」として活動する。

①は、留学中の目標という短期的なゴールにとどまらず、長期的にグローバルリーダーを目指してほしいという期待ではあるが、②と③は、それぞれ派遣留学生へのタスクとして課したものを役割として表している。

②は、事前研修に組み込まれた学習テーマ「日本の理解と日本発信プロジェクト」と関連し、派遣留学生は研修において日本の文化的な背景や良さ、課題を再認識することで、日本の理解を含め、留学先で発信するテーマ（日本発信プロジェクト）を考察することとなる。そしてこれを基に派遣留学生は留学中に「日本のアンバサダー」として日本について発信しなければならない。具体的には、日本のアニメの上映会を行い、そこから見える善悪の考え方などを現地の人とディスカッションすることで、日本人の考え方を紹介するといった活動や、居酒屋でアルバイト経験のある学生は、日本食パーティーをする際に、居酒屋の道具を持ち込み、サービスを提供することで、日本のおもてなしの文化を紹介するなど、学生の個性を活かした活動がなされている。

③は、派遣留学生は選ばれた者としてただ受動的に留学に行き帰ってくるだけでなく、主体的に留学の経験を発信、その成果を社会に還元し留学気運を醸成する、すなわち新たな留学文化を創出する任務を負っている。身近な先輩や友人がその留学経験を語ることで留学を目指す若者が増えることを期待している。このエバンジェリスト活動は、既に帰国している第一期生を中心に活動が行なわれている。 具体的な活動としては、“トビタテ！学生発信局”（http://tobitate-student.com）というサイトを派遣留学生自らが運営し、自分たちの留学体験やその想いを紹介するというインターネットを活用した発信の他、派遣留学生主催での説明会を各地で行うなど多岐にわたっている。

本プログラムでは、グローバル人材の育成と留学機運の醸成という２つの目的を担っているため、このような形で支援を行っている。今後は、継続的な支援を提供すると当時に、派遣留学生をネットワーク化し、支援を受けた派遣留学生が、エバンジェリスト活動を中心とした活動を通じて、その成果を社会に還元していけるような流れを作っていきたいと考えている。

支援企業との関わり

本プログラムは、前述したように、民間企業等からの支援で成り立っている。年間 200 社の企業訪問を目標として、下村大臣以下文部科学省の幹部が総出で企業を訪問して企業に寄附を依頼した。最初は、なかなか寄附金の拠出決定がもらえない日々が続いたが、企業の意向をヒアリングし制度の内容に反映させたり、民間でファンドレイザーとして活動している人から意見をもらうなどの改善を行い、平成 26 年３月から企業からの拠出決定が続き、平成 27 年３月には、目標の半分となる 100 億円の寄附見込みを突破した。

支援企業には、寄附金という経済的な支援だけではなく、様々な形で、人的支援、物的支援を行っ

独立行政法人日本学生支援機構 Copyright © JASSO. All rights reserved.

て頂いている。その最たるものが、学生の選考だ。本プログラムに応募した学生を、書面審査と面接審査の２段階の選考で合格者を選んでいる。この２つの審査に、支援企業の採用担当者が関わり、学生を審査している。個別企業の判断軸ではなく、異なる企業の選考官が同じ目線で本プログラムの派遣留学生を審査するというのは画期的であり、面接審査を行なった企業の担当者からは、自分の夢を語る学生を見る事で、企業の採用のときに見られない一面が見られてより意義を感じたという御意見を頂いている。採用された学生に対しては、事前・事後研修や留学中にアドバイスを行なうメンターといった形式でも支援頂き、その他、留学中の海外インターンシップ先の提供等、支援の形は多岐にわたっており、社会総掛かりで留学機運を醸成する取り組みとして拡がっている。

最後に

これまでの１年を振り返り、今後の展望を鑑みると、解決すべき障壁は多い。顕在化している課題の一つとして、想定している応募者数と実際の応募者数に乖離が生じている点が挙げられる。本プログラムの広報は、官民協働ならではのアイデアやリソースを生かしつつ、公式ウェブサイト（http://tobitate.mext.go.jp）、ポスターやリーフレット、説明動画、新聞・雑誌等のメディア活用等によって学生や生徒、大学・学校関係者を中心に広く行っているため、本プログラムの認知は高まっていると思われる。しかしながら、学生の本プログラムへの応募状況を見ると、事業初年度となる平成 26 年度の第１期生には全国 221 校より 1,700 名の応募があったが、第２期生、第３期生の定員 500 名に対する応募はそれぞれ 173 校より 784 名、212 校より 1,290 名と第１期生よりも少ない応募数であった。これは、トビタテ！留学 JAPAN を「知っている」状態から「応募する」行動に移すための動機づけが弱いことが要因であると推察している。

上記課題の解決策としては、学生への働きかけと、教育機関・地域への働きかけを強化する必要があると考えている。学生への直接的な働きかけは、派遣留学生によるエバンジェリスト活動を活用することで、留学を身近に感じ、本プログラムを応募しやすくする効果が期待できる。

また、学生等の留学を直接に後押しする立場にある大学及び高校等の教育機関に対しては、本プログラムで育成したいグローバル人材の社会における必要性や、支援企業が求めるグローバル人材及び学生等の留学に対する理解について問題意識や課題を共有し、教育機関を巻き込むことで「知っている」から「応募する」への後押しにつなげていきたいと考えている。

また、現在の活動は 2020 年を一つの区切りとしているが、官民が連携してお互いの強みを活用している奨学金プログラムは他に例がなく、この仕組みをどのように社会に波及させ、持続させていくかが重要である。

我々PT では、今後も支援企業・教育機関と連携を密にし、日本における留学機運を高め、グローバル人材の育成に貢献していきたい。

独立行政法人日本学生支援機構 Copyright © JASSO. All rights reserved.